『不知火海沿岸』、血を噴きあげる怒りの街へ

――初期水上勉論　第三回

田村景子

――要旨

短篇推理小説「不知火海沿岸」（一九五九年一二月）は、社会的な視野をもつ書下ろし長篇推理小説『霧と影』（同年八月）でデビューしたばかりの「新人」水上勉が、テレビで水俣病の今をめぐるドキュメンタリー番組『奇病のかげに』（同年一一月）を観てすぐ、水俣に赴き二週間ほどの取材の後、一気に書きあげた作品である。数か月後に刊行された書下ろし長篇推理小説『海の牙』（一九六〇年四月）に発展的に吸収されたというのが通説で、これまで単独で論じられたことはない。

しかし、現実の水俣奇病問題も、フィクショナルな殺人事件も解決のないまま終わる小説「不知火海沿岸」は、推理小説を書きだして間もない、解決を不可欠とする推理小説的ストーリーラインに魅力を感じつつも、それを絵空事とうけとめもする水上勉が、水俣病と新たな社会的弱者の惨憺たるありさまに接して、社会的弱者の強い願いと激しい怒りによりそい「血を噴きあげる怒りの街」を結末に出現させた、自信作であった。

本稿は、まず『奇病のかげに』から社会的弱者への共感と、推理小説的なストーリーラインを読みとる。番組のディレクター小倉一郎と同時代の「残酷」と「推理」ブームを共有していた水上勉が、小説「不知火海沿岸」に仕掛けた奇病をめぐるストーリーラインおよび殺人事件をめぐるストーリーラインを確認したうえで、それら解決をめざす二つのストーリーラインを切断してしまう、漁民の怒りと願いに発する暗いストーリーラインをうかびあがらせる。かさねて、物語内新聞記事がいかに実際の新聞記事を利用しつつどう編成し直したか、なにを加えなにを除いたのかの検討も試みたい。

1　一九五九年一一月二九日放送『奇病のかげに』の衝撃

水上勉が一九五九年一二月、「別冊文藝春秋」第七〇号に発表した短篇推理小説「不知火海沿岸」を書くきっかけに、当時のＮＨＫの

ドキュメンタリー番組『日本の素顔』の『奇病のかげに』があったことは、水上勉みずから繰り返し語っている。

いまから思うと、私は、この当時、まだ作家というには初顔で、文壇にも出ておらず、原稿注文もない境遇だったが、水俣病への関心はまったく、個人的なことだった。ある日、NHKのテレビをみていたら、熊本県水俣市に起こった奇病の実態を画面にうつして、アナウンサーは、気の毒な瀕死の患者たちの顔をカメラでなめながら、この恐ろしい病気の原因は、いまだにわからず、工場の放出する廃液中にふくまれる水銀の影響だという説は、確定的とはいえない、といい、凡そ四十九人の死者が出たのに、未だにその病因の究明されない点は不幸というべきで、患者たちは、工場廃液説をとって、日夜の陳情をつづけているが、工場は関知しないことだとつっぱねて、見舞金さえ出していず、また、政府もこれを手をこまねいて眺めている実情である、という意味のことをいっている。私は驚いた。これは白昼堂々と、大衆の面前で演じられている殺人事件ではないか。どこかに犯人がいるはずだ。一つ実情を見てきよう。[1]

NHKの『日本の素顔』は、一九五七年一一月から一九六四年の四月まで、NHKテレビで毎週日曜の夜、放送されていたドキュメンタリー番組である。その第九十九集にあたる『奇病のかげに』は、一九五九年一一月二九日、二一時三〇分から二三時まで放送された。水上勉はこの番組を観てすぐ水俣行きを決め、一カ月ほどの宿泊費をもって翌三〇日に東京を発った。

この水俣行きには作家としての野心もあった。エッセイ「金閣と水俣」では、「出かけた理由に水俣について何か書いてみたい下心がもちろんあった。貴重な銭をつかうのである。ただでは帰れない」と記している。[2] また、「金閣と水俣」には、番組以前に新聞ですでにこの「奇病」にふれていたらしい記述もある。

しかし、番組を観て即座に水俣行きを決め、翌日水俣に向かったことは、水上勉にとって、いかにこの映像が衝撃的だったかを物語る。「これは白昼堂々と、大衆の面前で演じられている殺人事件ではないか。どこかに犯人がいるはずだ」という言葉からは、社会的な広がりをもつ書下ろし長篇推理小説『霧と影』（一九五九年八月）でデビューしたばかりの「新人」水上勉の、新たにとりくむべき事態かつ事件発見の興奮が伝わる。

2　新たな「残酷」の時代に

『奇病のかげに』のディレクターは小倉一郎である。テレビ・ドキュメンタリー草創期における伝説的人物で、NHKのメディア研究部の桜井均、東野真による連載「製作者研究〈テレビ・ドキュメンタリーを作った人々〉」でもその【第一回】でとりあげられている。

一九五八年九月放送の『嵐の中の先生』からディレクターとなった小倉一郎は、第四回として『奇病のかげに』を制作した。「ディレクターとして2年間で10本あまりの番組を制作し、近代化の歪み、労働争議、炭鉱事故など広範な社会問題を精力的に取り上げた。と

りわけシリーズ第99集『奇病のかげに』（1959）は、水俣病の深刻な実態を全国に知らせるきっかけとなった先駆的なテレビ・ドキュメンタリーとして知られる」とし、小倉一郎の姿勢をこうまとめた。「小倉は日本のドキュメンタリーの草分け的な存在の亀井文夫監督（1908～1987）が虐げられた者の代書人と自称したことに深く共感し、自らも、映像記録を現場の「証拠保全」の道具として使用し、テレビを社会的弱者に供するメディアとしてはっきり位置づけた」[3]。

社会的弱者へのつよい関心と共感は、水俣奇病患者と漁民たちへの関心と共感として『奇病のかげに』の随所にあらわれている。『霧と影』で当時の左翼政党の一部の指導者の暴走によって踏みつぶされる零細な小企業の惨状をえがいたばかりの水上勉に、『奇病のかげに』に登場する棄民化された奇病患者たちがつよく訴えかけないはずはない。[4]

一九一九年生まれの作家水上勉も、一九二八年生まれのテレビディレクター小倉一郎もひとしく、同時代の社会的弱者を襲う新たな「残酷」に直面していた。

異端の民俗学者の宮本常一、作家の山本周五郎、経済学者の楫西光速（かじにしみつはや）、作家で社会運動家の山代巴の四人を編者として、『奇病のかげに』放送と同じ、そして水上勉の水俣取材旅行の始りと同じ一九五九年一一月に、平凡社から刊行の始まった『日本残酷物語』は、第一部「貧しき人々のむれ」、第二部「忘れられた土地」、第三部「鎖国の悲劇」、第四部「保障なき社会」、第五部「近代の暗黒」と近世から近代に最下層の民衆を襲ったさまざまな「残酷」をクローズアップした。ただしそれは、一九五六年の経済白書が「もはや戦後ではない」と謳った、戦後にまで及ぶ近代の「残酷」の終わりを確認するものではなかった。

『日本残酷物語』シリーズは、この後、一九六〇年一一月刊の「現代篇1 引き裂かれた時代」、翌年一月刊の「現代篇2 不幸な若者たち」と続く。『日本残酷物語』はけっして時代錯誤的な「残酷」の掘り起しではなかった。新たな「残酷」は、始まりつつあった明るい高度経済成長時代にこそ際立つ暗い「残酷」だった。それは、明るさのなかで、「近代の暗黒」と通底しながらも、それら以上に見えにくく感じにくくなった「残酷」といってよい。

「現代篇1 引き裂かれた時代」巻は、「巨大産業の底辺」「労働者のふるさと」「風と水の記録」「現代の傷痕」の四章立てであり、「労働者のふるさと」の「むしばまれる労働」では「水俣病」とのタイトルで、水俣病のもたらした前代未聞の「残酷」と、新たな社会的弱者の惨状がとりあげられている。他の文章と同じく筆者は記されていないが、独特な用語と文体からして「執筆者」のなかに名のあがる石牟礼道子であろう。[5] この文章については、後で小説「不知火海沿岸」における「漁民暴動」の叙述と比較する。

こうした「残酷」と水俣病とのかかわりでいえば、小説「不知火海沿岸」も少し後に「残酷」物語として分類されている。カッパブックス『日本代表推理小説全集4 残酷・復讐編 不知火海沿岸』（一九六五年五月）にも、「残酷」の第一作として、小説「不知火海沿岸」があげられた。[6]

テレビ・ドキュメンタリー『奇病のかげに』も短篇推理小説「不

知火海沿岸」も、ルポルタージュ作品「水俣病」も、同じく「残酷」という問題圏内にあったといえよう。

3　水俣病患者の映像

『奇病のかげに』はしかし、水上勉に新たな「残酷」すなわち一般市民から見捨てられた社会的弱者の悲惨を教えただけではなかった。『奇病のかげに』では、新たな社会的弱者の惨憺たる現状へ接近すると同時に、その問題解決への希求がくりかえし語られていた。

映像を観た水上勉は、「これは白昼堂々と、大衆の面前で演じられている殺人事件ではないか。どこかに犯人がいるはずだ」と確信するが、それはデビューしたての社会的推理小説家だけの特異な確信ではなかった。『奇病のかげに』には、社会的弱者へのしかかる事件をたしかめ、出来事の真相を推理し、犯人を特定して事件の解決へとたどりつこうとする推理小説的なストーリーライン（特定の方向をもった物語展開のありかた）がはっきりと示されていたのである。

まず、『奇病のかげに』の展開を示しておこう。[7]

1　水俣病で苦しむ患者たちそれぞれの姿。患者のほとんどは漁民である。「水俣病患者七八人、内死亡者三一人」と示される。

2　水俣市の紹介。ひときわ目立つ大工場。排水物に魚が汚染されたか。魚を獲れない漁民、患者たちそれぞれの生活の窮迫。

3　水俣市における漁民は、地域では力の弱い少数者であり、代弁する議員もほとんどいない。

4　奇病の正体をめぐる意見の対立。熊本大学世良医学部長は工場からの廃液の可能性が高い（有機水銀説）と述べ、会社の吉岡社長は工場から出るのは無機水銀であり、それが有機水銀となるか究明されていないと工場の関与を否定。

5　死者が増えていく。水俣病と判明してから四年、当局の打った手はきわめて貧しい。仕事を奪われた漁民、患者の家族の生活への具体的な対策は皆無である。

6　今月の初めに国会議員を中心とする水俣病調査団が訪れた。ようやく中央の政治の問題となる。漁民たちはデモ行進して、工場への乱入。[8] 漁民たちが工場にダイナマイトをしかけるという噂。

7　会社側が排水処理施設の整備を進める。今の日本では第一級のものという。「知事のあっせん」で事態は「新しい段階」へ。

8　漁民たち、それぞれの切実な願いと訴え。

9　次のナレーションで締めくくられる。「これは南九州の一つの街で起きた悲惨な出来事です。そしてそれはまた住民の生活を守る地方政治のあり方、大企業の生産のあり方など、我々に多くのことを教えているようです。罪のないそして力のない人たちに降りかかった大きな災難、早く本当の原因が究明され、一日も早く医学の力が、この病気の治療方法を見つけ出してくれるように、そしてさらに強い政治の手を、これがすべての患者や家族たちの心の中の願いなのです」。

この展開で重要なのは、4と7をのぞいて、地域では圧倒的少数

者であり弱者である漁民と水俣病患者の姿がとらえられていることである。しかも冒頭に登場するのは言葉がもつれ表情が不安定な女性患者で、ラストでは目の不自由な少年の患者が母に支えながら必死に歩く。熊本放送（テレビ）における水俣病関連ニュースの推移を調査した、マス・コミュニケーション論の藤田真文によれば、患者については、「一九五九年、六〇年の報道初期には報道対象として、ほとんどとりあげられていない。この時期の終わり六四年、六五年ごろからようやく報道されることになった」[9]。『奇病のかげに』は地元でも映しだされることがきわめて稀だった患者の姿を冒頭から、そしてほぼ全編にわたり映しだしていたことになる。しかも、その展開において個々の患者と漁民がやがて層としての社会的弱者を形成し、個々の願いが集団の訴えへと結実するのも重要である。

4　「推理ブーム」の意義と限界

ただし『奇病のかげに』の仕掛けはそれだけではなかった。これらの社会的弱者の惨状は、推理小説的な用語とストーリーラインによってとらえられていたのである。

1では「これはだれに責任があるのか。世にも不思議な病気の話です」と始めたナレーターは、「はたして、この病気の正体は何か。患者は漁師に多いこと、その人たちはいつも魚を多く食べていること。こんなところから、その原因は魚にあることだけは推理できます。しかし、そのほかの正体については、当時ほとんどが謎でした」と語る。

4では「それにしてもこの謎の奇病の正体はいったいなんでしょうか。熊本大学医学部、ここでは三年来、いわばこの病気の犯人探しを続けています。乏しい研究費、この人命にかかわる病気に出た予算は県も国もこれまでわずかなものでした。始め発表したのはマンガン、続いてセレン、三転してタリウム説、一時は迷宮入りが伝えられたこともあります。そして現在の有機水銀説」と語られ、5では会社の吉岡社長までもが、「原因究明を急いで強力に推し進めていただきたい」と述べる。9の締め括りのナレーションは、これら推理小説的なストーリーラインのまとめになっている。

あきらかに『奇病のかげに』は、当時の推理小説、しかも社会的なひろがりをもった推理小説ブームの圏内にあった。『霧と影』によってそのブームの先端をにない、さらにその先を期待され、みずからも熱心に模索していた水上勉が、『奇病のかげに』の試みにつよく反応しないわけはない。「これは白昼堂々と、大衆の面前で演じられている殺人事件ではないか。どこかに犯人がいるはずだ」という言葉は、後の回想にまして当時のつよい思いだったにちがいない。見捨てられた社会的弱者への共感と推理小説的な犯人および原因特定への強い意欲において、水上勉は『奇病のかげに』の制作者に同時代の共闘者を見いだしていたのではないか。

水上勉も担い手の一人だった当時の社会的な推理小説ブームは、テレビ番組『奇病のかげに』を視野に入れるなら、けっして小説にだけでなく、ノンフィクションやドキュメンタリーにもひろがっており、この時代と社会が浮上させた「推理ブーム」の顕著なあらわれと考えられる。今後、「推理小説ブーム」の研究は、文学分野での

研究にとどまらず、新たでかつ見えにくい「残酷」の時代にあらわれた、諸ジャンルを横断する「推理ブーム」としての考察が不可欠になるだろう。

ただしその際、ぜひとも注意しなくてはならないことがある。事件史にかかわる貴重な一時資料を集めた水俣病研究会編『水俣病研究資料集［上巻］』[10]の「まえがき」には、次の指摘がある。「一九六八年九月までの事件史は、まず水俣病の原因究明が先決ということを理由にして被害の拡大防止に必要な対策を怠り、ついには原因究明そのものを棚上げして、水俣病問題を一時的に封じ込めることに成功した時期である」。

『奇病のかげに』で「犯人」側と目される吉岡社長が自信たっぷりに「原因究明を急いで強力に推し進めていただきたい」と述べていた奇妙さは、後からみればそうした時期におけるひとこまであったのだ。「原因究明」を掲げた『奇病のかげに』の先駆的な意義を十二分に認めつつ、その限界も見逃してはなるまい。これはそのまま、当時の「推理ブーム」にもあてはまるだろう。こうした限界をふくめて検討をすることによって「推理ブーム」研究をより意義のあるものにしなければならない。

社会的な推理小説ブームの只中から出現し、ブームを一時華やかに担い、やがて推理小説の定番への疑いによって推理小説から離れていった「初期水上勉」こそ、そうしたブームの内実をはっきりさせるために不可欠な存在といえよう。

5　奇病と事件をめぐる二つのストーリーライン

『奇病のかげに』に衝撃をうけた水上勉が、「これは白昼堂々と、大衆の面前で演じられている殺人事件ではないか。どこかに犯人がいるはずだ」という確信をもって水俣を訪れ、ほぼ二週間の取材の後、速いスピードで書きあげた小説「不知火海沿岸」にもまた、物語の始まり数ページで早くも、水潟市で発生した奇病をめぐる社会的推理小説のストーリーラインがあらわれる。

明るく優勢な中心部の大工場と薄暗く劣勢な周縁部の漁村という水潟市の社会的地理に深く根差した「奇病」（この言葉は、得体の知れない病に苦しむ当事者にとって以上に、中心部を構成する大多数の工場関係者すなわち「市民」の無関心をあらわしていた）が発生した。原因は何で、犯人は誰なのか。工場犯人説とそれ以外のいくつもの犯人説が対立し、謎は深まるが、しかし患者は増え死者は増えつづける。物語の展開によって、やがて犯人がうかびあがり、犯人を支える社会的地理もろともに鋭く告発されるだろう、否、されねばならない――。

これは『奇病のかげに』のストーリーラインをほぼ踏襲あるいは共有したストーリーラインといえよう。星の浦という部落で奇病にかかった九歳の女の子の病状と両親の苦しみが冒頭近くにあらわれることも、冒頭で患者たちの姿を執拗にうかびあがらせた『奇病のかげに』とかさなる。

つづいて登場する四一歳の医師木田民平は、いっそうはっきりと

した推理小説的ストーリーラインをたずさえている。

奇病の実際を調べてまわる謎の男（東京の保健医結城宗市）と、その妻である結城郁子、さらには謎の男たち（自称工学博士浦野幸彦、助手錦織季夫）が登場し、次つぎに姿を消す。どうやら密かに殺人が実行されているようだ。出来事の背後にはなにがあるのか。やがて旧軍閥系の大規模な密輸組織のかかわりがうかびあがるなか、さて、事件はいったいどんな解決をみるのか――というストーリーラインである。「木田民平は推理癖があるけれど、瀬良警部補のように探偵業ではない」と紹介される木田民平医師と瀬良富太郎警部補とのタッグが、推理小説における推理力と行動力を担い物語を展開させる。いうまでもなく、これは『奇病のかげに』にはない、小説「不知火海沿岸」で加わったフィクショナルなストーリーラインである。

とはいえ、実際に起きている奇病をめぐるストーリーラインと、フィクショナルな殺人事件にかかわるストーリーラインとは、まったく別物ではない。木田の医師という職業は奇病患者の姿を間近にとらえることを可能にし、また街で起きている漁民と工員との暴力事件に医師としてかかわらせる。事件を追って村々をまわる瀬良はそこで奇病の深刻な影響を目の当りにし、また、旅館などへの巨大工場のつよい影響力を再確認するほか、奇病に発する漁民暴動への水潟警察署内に高まる警戒感を伝えもする。木田の推理力と瀬良の行動力によって二つのストーリーラインは、重なりあいながらそれぞれの解決をめざし展開するのである。

6　解決をめざすがゆえに、解決の不可能性に直面する

殺人事件にかかわる「奇怪」さにとまどい真相解明へ弱気になる瀬良に、木田はこううながす。「奇怪なことはいっぱいあるよ。そのことは水潟の奇病にだっていえるんだ。犯人が誰かわからないのに、バタバタと大勢の人が死に、また今日も死にかけているじゃないか、要するに、ここでくじけて捨てちゃいかんということだ。いいか、君と僕が、いま、結城宗市の捜索を打ち切ったら、誰がやるだろう」。

これは木田から瀬良への言葉であり、奇病をめぐるストーリーラインと殺人事件をめぐるストーリーラインとを束ねる言葉であることは明らかだが、同時に、ここまで読みすすめてきた読者への、推理小説作家ならではのメッセージであろう。読者は事件の解決をめざし、様々なモチーフによって織りあげられるストーリーラインをなんとしても放棄してはならぬという、推理小説の暗黙の了解からのつよいうながしである。虚構の中の小さな事件を丹念にたどり解決をめざす読者は、現実の巨大なる事件に対し向きあう者になりうるのではないか。ぜひともそうあってほしいという社会的な推理小説作家ならではの願いでもあろう。

しかし、解決をめざす二つのストーリーラインがみえてくればくるほど、物語をつきうごかすもう一つの暗い力もまたみえてくる。奇病にとってはたして解決とはなにか。原因究明か。原因がわかったとしても奇病はなくなるのか。ここまで事態を放置した工場と政

治が動くのか。奇病で危機に瀕した漁業の回復はいつになるか、今の状態のままならば、原因究明も事態の解決も不可能ではないか、など。漁民たちのこうした疑問と不安と怒りの表出、しかもそのかぎりのない高まりというストーリーラインである。この漁民たちの怒りは、患者と漁民に日々接する木田も共有していた。「漁民の激怒する理由はよくわかりますね」との結城宗市の言葉に応えて木田は興奮して言う、「同感です。わたしも分かりますよ。いま、魚が売れないので、沿岸漁業は死滅寸前ですよ」。

「怒り」といえば、取材にきた水上勉をつきうごかしていたのもまた「憤り」であり、「怒り」であった。「この昭和三十四、五年の水俣病患者はみじめで、今日のような脚光も、関心もあびていなくて、被害者は訴えるすべもなく、悶絶する労苦をなめながら、はるか熊本県の片隅で死んでいったのである。／いま、水俣病が公害の原点ともいわれ、国民的関心を得るようになっているのは、皮肉なことながら、慶賀にたえないが、私はあの当時、ひとり水俣市にきて、海辺を歩いて憤りを自分につきつけた日のことをわすれることができない」[11]。

同じことは、小説「不知火海沿岸」執筆の少しあと、『海の牙』刊行の直後に記されたカッパノベルス『耳』（一九六〇年五月）の「あとがき」で、「……事実起きた事件について、作者が持たねばならなかった怒りや願いを、推理小説のかたちのなかにとかしこむ努力をしてきた」と述べている。

三つ目のストーリーラインである漁民たちの怒りのかぎりない高まりは、作者水上勉じしんの「怒り」、すなわち事態の解決というつよい「願い」をもつがゆえの、事態がいっこうに動かず解決しないことへの「怒り」の表出に裏打ちされていた。

7　「暴動」の亢進を記す二つの新聞記事

物語は患者と漁民たちの「怒り」に発する二つの大きな「暴動」にはさまれている。そして二つの暴動はともに、「新聞記事」として登場する。

最初の記事は、物語が始まって間もなく、木田が往診ででかけた奇病患者の家で、奇病について話を聞きにきていた東京の若い医者（結城宗市）を見た夜、自宅で目にする新聞の記事である。「ごろんと横になって木田は新聞を見て、急に目を光らせた」。記事の見出しは「水潟にふたたび不穏な気配／十日の漁民大会にダイナマイトで工場爆破説！」。見出しにうながされ木田が新聞を読む物語内時点は一九五九年一〇月五日である。

> 去る二日、水潟奇病による沿岸漁業の危機を訴えて東洋化成工業に団交を申し込み、これが拒絶にあって激怒し、暴民と化した不知火沿岸漁民代表三百名は、同工場大門で応援警察隊と激突、二十数名の負傷者をだす不祥事をひき起こしたが、それから二日目の四日午後一時、またまた県警本部に漁民攻勢第二波の物騒な噂がキャッチされた。確実な情報通の語るところによると、県漁連は来る二十日[12]に水潟市公会堂で、東洋化成工場排水停止促進大会をひらき、そのあとで漁民大会のデモにうつ

るが、この日は漁民側より代表者を工場に送り、漁業補償と排水停止の回答を強硬に迫るものとみられる。当日もし、工場側が二日のごとき一方的硬化の態度に出た場合は、全漁民は天草、葦北、八代地方より約三千の船団を組んで水潟市に上陸する。漁民のうちには、ダイナマイトを用意して工場排水口の爆破もやむなしとする過激人員も多数加わっている模様である、というもの。この情報が入ると県警本部は緊張し、境署長を中心に四日夜署長室で緊急会議をひらいた。それによると署長は非公式に漁民出の県議を招いて、十日の大会には絶対に不穏な事態を惹き起こさぬよう漁民の説得方を懇望した模様である。一方、水木東洋化成工場長、樽見水潟市長、水潟警察署長とも連絡して当日約三〇〇名の応援警官を待機させるなど、騒擾[13]にそなえて万全の準備に取りかかる旨公表した。

漁民の「怒り」に発した「暴動」をめぐる二つ目の新聞記事は、物語のほぼ結末にあらわれる。木田と瀬良が奇病にかかったカラスの群れに食いちらされた結城宗市の無惨な死体を発見したのが一〇月二九日。「熊本県水潟市に県政史上空前の惨状を物語る暴動が起きたのはそれから四日目であった。全国新聞は次のように報じている」。見出しは「漁民水潟市で再度の暴挙、団交拒否に怒り爆発。警官と激突、百数十人の重軽傷者！」。この新聞記事が「全国紙」に載った物語内時点は一九五九年一一月四日である。

水潟奇病視察のため来水した国会調査団への陳情と、漁民総決起大会のため、三日早朝から水潟市に集まった不知火漁民約三千人は、正午過ぎ団交申入れが東洋化成工場側の拒否にあったことから、大会を取りやめて、工場に押しかけ、午後一時五十分と六時十五分からの二回にわたって工場内に乱入、施設や機材をたたきこわし、ついに出動した警察と激突、双方に百人以上の重軽傷者を出した。水潟問題はついに流血の惨事を再度繰り返したが、この不祥事は一般市民の強い批判をうながしている。

この朝、船団を組んで百間港に上陸した葦北、八代、天草など不知火海沿岸漁民は、午前十時過ぎ、プラカード、のぼりなどを押し立てて市中をデモ行進、市立病院前に押しかけて、来水中の国会議員団に陳情文を読みあげ「代議士さま、恐ろしい病気で死にかけている漁民を助けて下さい。どうか工場から汚ない毒の水が流れないように、さし止める工夫をして下さい」と絶叫しながら、ジグザグデモに入り、気勢をあげた群集には、母を子を父を奇病に亡くした家族もまじり、前回デモで検挙された漁民八人が告訴された事実に激昂、急に興奮した集団は大会を取り止めて、東洋化成工場正門になだれ込んだものである。工場内事務所、守衛室、配電室等のガラス、器具、電子計算機などを、片っぱしから漁民は棍棒で破砕、血を噴きあげた漁民の怒りは、絶頂に達した。今夕、ようやく応援警官の出動で鳴りをしずめた水潟市は、恐怖の夜にはいり、市立病院、市内各病院は負傷者の続出で騒乱をきわめている。

奇病をめぐる解決に向けた事態の進展のなさに苛立つ漁民たちが、しだいに怒りをたぎらせていくさまが、物語の始まりと終わりにおかれた新聞記事にえがかれている。

8　血を噴きあげた漁民の怒りは頂点に

一〇月五日付の新聞記事を「一」とし、一一月二日付の新聞記事を「二」とすれば、「一」から「二」へと、このほぼ一カ月の間の事態の亢進、それに応じた漁民の怒りの亢進がはっきりと示されている。以下、その亢進を具体的に示す。

1　暴動の参加者の増大。「一」では「三百名」が、「二」では「約三千人」へ。

2　参加者の広がり。「一」では「不知火沿岸漁民代表」であるのにたいし、「二」では「不知火漁民」へと拡大する。

3　漁民と警察隊双方の負傷者の増加。「一」では「二十数名の負傷者」が、「二」では「百人以上の重軽傷者」となる。

4　工場への団交申入れ理由の増加、鮮明化。「一」ではまず「水潟奇病による沿岸漁業の危機を訴えて」であり、ついで予定される次の漁民大会の後、工場に「漁業補償と排水停止の回答を強硬に迫る」となり、「二」では具体的には示されず来水中の国会議員団への陳情文に「代議士さま、恐ろしい病気で死にかけている漁民を助けて下さい。どうか工場から汚ない毒の水が流れないように、さし止める工夫をして下さい」と要求はより具体的かつ全般的なものになっている。

5　漁民の怒りの亢進。「一」では「激怒」と記されこれでもじゅうぶん強いが、「二」ではさらに「血を噴きあげた漁民の怒りは絶頂に達した」と、これ以上の怒りはないという表現になっている。

6　漁民の活動の過激化。「一」では最初の暴動と、それがさらに過激化して工場排水口破壊のためにダイナマイトが使用されるかもしれぬという「物騒な噂」が伝えられる。「ダイナマイト」の噂は、物語中でこの新聞記事を読んだ木田の妻によって「八幡の排水口が爆破されたら、うちの家も吹っ飛ばされないかしら」との心配事として具体化され、それを言下に否定した木田も、やがてこう思わないわけにはいかない。「二日の漁民騒動は二十数名の負傷者で済んだからよかったものの、事態は新聞にも出ていたように不穏なものをはらんでいる。いつダイナマイトで工場が襲撃されるかもしれない恐怖の前夜ともいえる状態だ。工場側も話合いに応じようとしないし、漁民の怒りも今や頂点にきている」。木田がここでイメージした「恐怖の前夜」が、「二」に至って「恐怖の夜」そのものとなる。

7　個々人から集団へ。「一」の前にくりかえしあらわれる奇病患者の孤立、および患者家族の孤立の姿は、3であげたように「一」では「不知火沿岸漁民代表」、「二」ではさらに「不知火漁民」と増えつづける集団のなかに合流する。「気勢をあげた群集には、母を子を父を奇病で亡くした家族もまじり」と、背後には死んだ者たちも集合する。こうした「個々人から集団へ」と

いう展開は、患者の孤立する姿から始め漁民たちが集まりそれぞれの主張を口にする『奇病のかげに』においてもみられた。

8　漁民と市民の対立の鮮明化。7の漁民の集団化は、同時に大半は工場関係者である「一般市民」の集団化をもたらす。「一」では潜在化していて表面にはあらわれなかった。それが「二」では、次のように顕在化する。「水潟問題はついに流血の惨事を再度繰り返したが、この不祥事は一般市民の強い批判をうながしている」。この表現は、記事が「一般市民」の側に立って書かれているのを意味しない。7の漁民の集団化とその怒りの発露がもたらしたのが、工場に関係することで生活を成り立たせている「一般市民」の集団的な登場なのだ。工場内の資本家と労働者の階級対立の顕在化ならぬ、奇病問題をめぐる資本家と労働者の工場防衛と工場存続のための癒着があらわになったといってよい。「残酷」の観点からすれば、「一般市民」による少数者の棄民化こそ、高度経済成長に沸く時代の、新たな「残酷」なのである。

9　警察視点から漁民視点へ。「一」では二日の漁民たちの警察隊との激突が手短に紹介されてすぐ、県警本部にはいった漁民攻勢第二波の噂とその対策が長々とえがかれる。基本は警察視点の新聞記事になっている。それに対し、「二」ではほぼ全文が漁民たちの願いと怒りの行動に費やされている。はたして新聞がここまで漁民視点にたって書かれてよいのか。むしろ体制秩序保持の「一般市民」の側からえがかれてこそ、漁民たちの怒りがせりあがってくるのではあるまいか、と思われるほどに。

10　出来事は始まる以前にも終わった後にも続いている。「一」は「去る二日」で始められ、騒動にいたる出来事が物語以前から続いていることを示し、「二」では「恐怖の夜にはいり」と出来事がこれからも続くことを示す。事態の解決がみえない漁民たちの怒りに発する出来事はすでに始まり、これからも終わることはないのだと、物語は語る。

11　地方紙から全国紙へ。「二」が「全国紙」の記事と記されていることから、「一」は全国紙ならぬ地方紙であることがわかる。「一」の地方紙の記事から「二」の全国紙の記事へ。水潟奇病の惨状と漁民の怒りはついに、一地方の問題から全国的な問題へとおしあげられたことになる。

以上の1から11は、漁民たちの怒りのかぎりない高まりという大きなストーリーラインをそれぞれの観点から支えかつ動かす、サブ・ストーリーラインの数々といってよいだろう。これだけ多くのサブ・ストーリーラインによって支えられた大きなストーリーラインが鮮明でないはずはない。

9　全国紙ならぬ地方紙をもとに書き換えていた

物語内新聞記事「一」から「二」へ――一〇月二日に最初の暴動、不祥事がおきた後、事態はいっそうおさまらず、むしろより大きな暴動へと発展し、ついに一一月三日の「県政史上空前の惨状を物語る暴動」が起きたというほぼ一カ月の時間的経過は、小説「不知火

海沿岸」が創りだしたフィクショナルなものである。

しかしそれらがすべてフィクショナルなものとはいえない。水俣市で起きた漁民たちの運動をめぐり、水上勉は主に実際の新聞記事からひろいあげつつ、それを並べ替え、あるいは省略しあるいは書き加えてフィクションにくみこんでいたのである。

「二」は明らかに次の熊本日日新聞の記事を踏まえていた。見出しは「漁民またも暴力沙汰・水俣工場内に再度乱入　警官と衝突百人余が負傷／団交拒否に怒り爆発／工場の被害八百万円」である。

国会調査団への陳情と漁民総決起大会のため二日早朝から水俣市に集まった不知火海区漁民約二千人は、正午すぎ団交申し入れが新日窒水俣工場側の拒否にあったことから、総決起大会を取りやめて工場に押しかけ、午後一時五十分と六時十五分からの二回にわたって工場内に乱入、施設や機材をたたきこわし、ついに出動した警官隊と衝突して双方に百人以上の重軽傷者を出した。水俣病問題は流血を招いて最悪の事態に突入したが、この漁民の暴力沙汰には県市民の強い批判がおきている。

この朝船団を組んで百間港に上陸した葦北、八代、天草など不知火海区漁民約二千人は午前十時すぎからプラカード、のぼりなどを押したてて市中をデモ、市立病院前におしかけて同所で来水中の国会調査団に村上県漁連会長ら代表が陳情文を読みあげて窮状を訴えた。／このあと漁民たちはジグザグデモで気勢をあげながら総決起大会場の水俣駅前広場に向ったが、前日新日窒水俣工場が十月十七日の第一回漁民大会のさい工場に押しかけて乱暴を働いた漁民八人を告訴したことなどが漁民を強く刺激、デモ隊は急に大会をとり止めて午後一時五十分工場正門に殺到した。／先頭が門を乗りこえて内側から開扉したため約千人がなだれこみ、工場内本事務所、特殊研究室、守衛室、配電室に乱入、手当たりしだいハンマーや木ぎれでガラス窓を破り、室内にあった電子計算機、テレタイプ、タイプライター、電話機、書類などをめちゃめちゃにした。／急を聞いて午後二時、待機していた県警察機動隊の一個中隊（百人）が工場東門に出動、制止したが、たけり狂った漁民たちは警察のジープの窓をこわすなどなおも暴れまわった。検束者二名を出して四十分後騒ぎは一応おさまったが、午後六時十五分、検束者の身柄を受け取りに行った竹崎葦北漁協長の帰りがおそいことから漁民たちは再び投石をはじめ正門内に乱入ついに警官隊も実力を行使したため昼の乱闘騒ぎで電灯をたたきこわされた暗闇の中で五十分間にわたり双方がはげしくもみあい、水俣病問題はついに血を見る不祥事態に立ち至った。

この二回にわたる乱闘で柿山水俣署長が頭に全治二十日間の裂傷、岩下同署次長が左アゴに全治二十日の打撲傷を負うなど警官六十五人、西田工場長をふくむ工場側三人の重軽傷者を出したほか漁民側の負傷者も三、四十人（竹崎葦北漁協長談）という。工場側の損害は三日調査するが被害額は八百万円に達するものとみられている。／なお漁民たちはようやく午後九時すぎ解散したが、三日も大会をひらくようなので警官隊も待機して厳重にその動きを監視している。（以下警察側、漁民側、工場側

それぞれの談話は省略）

熊本日日新聞一九五九年一一月三日朝刊一面

「全国紙」である朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の一一月三日朝刊にも、たしかに国会調査団来水時のこの騒動はとりあげられている。全国紙によるこれらの報道は、水俣病が初めて全国的に知られるきっかけとなった。見出しはそれぞれ、「水俣病（熊本県）で漁民騒ぐ　警官72人が負傷／新日窒工場に押しかけ」（朝日新聞）、「乱闘、数十人が負傷　熊本の水俣病　漁民二千人と警官隊」（毎日新聞）、「乱闘、百余人ケガ　新日窒水俣工場　〝汚水〟怒り漁民乱入」（読売新聞）であるが、記事の分量はいずれも地元紙の熊本日日新聞のそれの半分に満たない。

読み比べてみると熊本日日新聞の記事は「二」の記事と、見出しもほぼ重なり、記事の文の運びも重なるところが多い。「二」にあらわれる漁民の暴動への「一般市民の強い批判」は熊本日日新聞の記事にみえる「県市民の強い批判」とほぼ同じであり、朝日、毎日、読売の各記事にはでてこない（「県市民」から「一般市民」への書き換えは、地方紙を「全国紙」にしようとする際の工夫のひとつであろう）。そして、暴動が終わらず「恐怖の夜」を迎えているという「二」の特徴的な結びも、「三日も大会を開くようなので警官隊も待機して厳重にその動きを監視している」という熊本日日新聞の結びと遠くはない。朝日、毎日、読売はいずれも、出動した警官隊による暴動の収束で記事が結ばれており、「二」とは異なる。

10　順序の入れ替えで創りあげられたストーリーライン

「二」が熊本日日新聞の実際の記事を参考にしていたとすれば、「一」の新聞記事も、次の熊本日日新聞の記事を踏まえていたといえよう。見出しは「ポンプ爆破も計画か　不知火海漁民　県警に対策委員会」である。

県警本部はさる二日新日窒水俣工場で騒ぎを起した不知火海沿岸漁民を制止しようとして警官と漁民の双方に百三十余人の負傷者をだした事件についてこんごの対策を検討していたが、十日同本部に水俣問題対策委員会を設け、断固たる態度でのぞむことになった。情報によれば漁民側は十六日開かれる県議会水俣対策委員会に漁民の決意を反映させるため、十五日に前回を上回る大衆動員を行い、ダイナマイトなどで工場側の工業用水の揚水ポンプを破壊する計画もあるといわれ、再び大規模な騒ぎが予想されている。そこで警察本部は慎重に事件の防止策をねっていたもの。警備動員計画もすでにできているが、職務を完全に遂行するためには千人を越える警察の動員が必要で、場合によっては持凶器集合罪などの適用も必要という。

上原本部長の話　情報がほんとうだとすれば、こんどの漁民大会は前回を上回る人数を集めるときいており、警備問題で頭をいためている。漁民の窮状はよくわかるが不法行為は絶対に見逃すわけにはいかない。断固たる態度でのぞむことは当然、

すでに準備もできている。また問題の〝原因〟についても厚生省などでちかく結論がでると思うが、もし会社の方に業務上の過失があれば各関係筋とも連絡検討して処することになる。

熊本日日新聞　一九五九年一一月一一月朝刊七面

「さる二日」の暴動から始まり、さらに大規模な暴動の可能性の情報が県警本部にもたらされ、そこにはダイナマイトによる工場施設の破壊計画のうわさも加わっていたことから、暴動の防止へ万全の準備をはじめた――これは「一」とほぼ重なる。ただし、いちじるしく異なるのは、暴動による負傷者の数で「一」が「二十数名」であるのに対し、ここでは「百三十人余」である。今後必要な警察の動員も「一」が「約三百名」なのに、ここでは「千人を越える警察の動員が必要」となっている。

しかし、これは作者水上勉が暴動の規模のスケールダウンを図ったことのあらわれではない。熊本日日新聞の記事の日付に注意すれば、「一」（物語内時点は十月五日）が参考にした記事は十一月十一日のものであり、「二」（物語内時点は十一月四日）が下敷きにした記事は十一月三日の記事である。「一」が参考にした記事の冒頭の「さる二日」とは十一月二日の暴動を指す。記事の後半部分で「漁民の窮状はよくわかる」、「問題の〝原因〟についても厚生省などでちかく結論がでると思うが、もし会社の方に業務上の過失があれば各関係筋とも連絡検討して処する」などと県警本部長が語らないわけにはいかないのも、十一月二日の国会調査団来水時の漁民の大規模な運動と、全国紙によるその報道以後だからである。実際の情報をもとにした十一月二十九日放送の『奇病のかげに』にも、ダイナマイトの噂は登場するが、それも十一月二日の暴動がきっかけであらわれた噂とされ、それにたいする工場側の防衛、防御の映像が続く。

物語内新聞記事「一」から「二」へ――一〇月二日に水潟奇病をめぐる最初の漁民の暴動がおきた後、事態はいっそうおさまらず、むしろより大きな暴動へと発展し、ついに一一月三日の「県政史上空前の惨状を物語る暴動」が起きたというほぼ一カ月の時間的経過は、小説「不知火海沿岸」が創りだしたフィクショナルなものである。[14]

作者水上勉は、主に熊本日日新聞の二つの記事を参考に、出来事の前と後とを逆転し、そこにダイナマイトといった過激なものをもくみこみつつ、より大きな暴動へ、「血を噴きあげた漁民の怒り」のより深刻な、かつより広範な可視化へというストーリーラインをつくりあげていたことになる。

11　漁民の願いと怒りによりそう

物語内新聞記事が参考にした熊本日日新聞と重なるところがはっきりすれば、逆に異なるところもまたはっきりする。「二」（物語内時点十一月四日）と熊本日日新聞十一月三日の記事とをあわせ読めば、熊本日日新聞記事にはない患者をふくむ漁民たちの願いと怒りが「二」に加わっていることがわかる。

まずは実際の記事から。「この朝船団を組んで百間港に上陸した葦北、八代、天草など不知火海区漁民約二千人は午前十時すぎからプ

ラカード、のぼりなどを押したてて市中をデモ、市立病院前におしかけて同所で来水中の国会調査団に村上県漁連会長ら代表が陳情文を読みあげて窮状を訴えた。／このあと漁民たちはジグザグデモで気勢をあげながら総決起大会場の水俣駅前広場に向ったが、前日新日窒水俣工場が十月十七日の第一回漁民大会のさい工場に押しかけて乱暴を働いた漁民八人を告訴したことなどが漁民を強く刺激、デモ隊は急に大会をとり止めて午後一時五十分工場正門に殺到した」。

「二」では同じ場面がこうえがかれる。「この朝、船団を組んで百間港に上陸した葦北、八代、天草など不知火海沿岸漁民は、午前十時過ぎ、プラカード、のぼりなどを押し立てて市中をデモ行進、市立病院前に押しかけて、来水中の国会議員団に陳情文を読みあげ『代議士さま、恐ろしい病気で死にかけている漁民を助けて下さい。どうか工場から汚ない毒の水が流れないように、さし止める工夫をして下さい』と絶叫しながら、ジグザグデモに入り、気勢をあげた群集には、母を子を父を奇病に亡くした家族もまじり、前回デモで検挙された漁民八人が告訴された事実に激昂、急に興奮した集団は大会を取り止めて、東洋化成工場正門になだれ込んだものである」。

両者を比べると、物語内新聞記事ではまず陳情文の内容が「代議士さま、恐ろしい病気で死にかけている漁民を助けてください。どうか工場から汚い毒の水が流れないように、さし止める工夫をしてください」と示される。さらに、気勢をあげた漁民の群集には「母を子を父を奇病に亡くした家族も」まじっていると語られ、死亡率が四割をこえる奇病の惨状が漁民たちをつき動かしていることが示される。漁業被害、生活被害から死に至る病まで、奇病の惨状を日々生きる漁民たちの願いと怒りが、「二」には加わっている。

ただし、これでもまだ漁民の願いと怒りがえがききれたとは言えないのは、同じ場面をとらえた次のような文章を読めばわかる。『日本残酷物語』の「現代篇1 引き裂かれた時代」に収められた「水俣病」で、筆者は石牟礼道子である。

昭和三十四年十一月二日朝、熊本県芦北郡、八代郡、天草郡など不知火海区漁民およそ二千人は、プラカードやのぼりなどをおしたてて水俣市中をねり歩いたが、そのデモ隊の姿は市民たちがかねて見なれている工場労組のそれとはずいぶん趣きを異にしていた。大半が黒い素足にちびた下駄をはき、十四、五歳の少年から白髪の老漁夫、ねんねこのなかの赤んぼに口うつしで飴をしゃぶらせている主婦などもまじって、耳なれない浜言葉をかわしながら、水俣病患者を収容している市立病院まえに集結した。

そして待ちこがれていた国会調査団がやっと到着すると、このデモ隊は、うやうやしくねじり鉢巻をとり、のぼりをたおして信頼をこめた言葉で苦境を訴えた。なかでも患者家庭互助会を代表した主婦の訴えは、きわめて印象的であった。

「国会議員のお父さま、わたくしたちは、あなたさま方を国のお父さまともお母さまとも思っております。ふつうならお目にもかかれるわたしたちではないのに、陳情申し上げるのは光栄であります。子どもを水俣病でなくし、夫は魚をとることもできず、泥棒をするわけにもゆかずにがまんしてきましたが、

これ以上はこらえられないところにきました。わたくしどもは、もうだれも信頼することはできません。でも国会議員の皆さまがきて下さいましたからは万人力でございます。皆さま方のお慈悲でどうかわたくしたちをお助け下さいませ……」

老漁夫のなかには、うなずきながら、外した鉢巻に目をあてている者もあった。瀟洒な病院のまえでおこなわれた会見は、一瞬中世の直訴を思わせた。

このような場面が作家水上勉になかったといえないのは、小説「不知火海沿岸」をリメイクした『海の牙』の一一月二日の場面で、物語内新聞記事というスタイルではなく、かなり詳しくえがいているからである。石牟礼道子の「水俣病」発表時より『海の牙』刊行が早いことから、あるいは石牟礼道子が二つの小説内描写を参考にしたこともあるかもしれない。

しかし、こうした場面をえがききれていないことが、小説「不知火海沿岸」という試みの意義を失わせはしない。むしろ漁民の暴動という出来事を二つの簡潔な新聞記事にまとめ、それを物語の始まりと結末に配することで、その間に展開する奇病をめぐるストーリーラインと、殺人事件をめぐるストーリーラインという解決をめざす二つのストーリーラインにたえず解決が遠いこと、安易な解決はけっして本当の解決につながらぬというもう一つのストーリーラインをつきつけ続ける——。

水上勉が水俣で取材してまわったのは、一九五九年一一月末からほぼ二週間である。一一月二日の出来事から一ヵ月近く経ち、すでに水俣では「調停」による解決が取りざたされていた。たとえば、熊本日日新聞の一一月二〇日朝刊には「水俣紛争の調停委／一両日中に人選」の記事が、また、一二月一八日朝刊には「水俣紛争円満解決へ／深夜、調停案に調印／会社側もついに呑む」の記事が載っている。岡本達明は『水俣病の歴史第三巻　闘争時代（上）1957—1969』（二〇一五年五月　日本評論社）で、「……県漁連闘争をまとめると、五九年一〇月一七日、一一月二日の二回にわたる一揆的な大衆闘争に始まったもののそれ以降実力行使はできず、一方的な県調停委の調停で終わった」と書いている。

水上勉の取材時はすでに、「調停」＝解決が盛んに取りざたされていた。にもかかわらず、小説「不知火海沿岸」には「調停」＝解決の見方はどこにもあらわれない。深刻きわまりない水俣病問題では、その場しのぎの対策や補償で解決は見いだせない、と水上勉は考えていたにちがいない。

これが、推理小説を書きだして間もない、解決を不可欠とする推理小説的ストーリーラインに魅力を感じつつも、それを絵空事とうけとめもする水上勉が、水俣病と新たな社会的弱者の惨憺たるありさまに接し、「血を噴きあげる怒りの街」で社会的弱者の強い願いと激しい怒りによりそったときうみだされた小説「不知火海沿岸」であった。

――注

(1)『海の牙』について、『水上勉社会派傑作選2　海の牙・爪・耳』（一九七二年一〇月　朝日新聞社）所収。引用は422～423ページ。

(2)「金閣と水俣」（『世界』一九七四年三月号）、『金閣と水俣』（一九七四年一一月　筑摩書房）に収められた。引用は二一六ページ。

(3)桜井均・東野真「製作者研究〈テレビ・ドキュメンタリーを作った人々〉第一回　小倉一郎（NHK）～映像と音で証拠立てる～」、「放送研究と調査」（2012年2月　NHK放送文化研究所）

(4)水上勉は「『霧と影』『巣の絵』について」（『水上勉社会派傑作選1　霧と影』一九七三年1月　朝日新聞社）で次のように書いている。以下の引用は三七三ページより。「先ず、身辺を見廻して、既成服行商時代に見聞したトラック部隊事件を思いだし、それを材料として、殺人をからませてみようと構想した。トラック部隊事件とは、当時の左翼政党の一部の指導者が、製品のストックで喘いでいる鉄、繊維などの中小企業問屋や工場から、販路を手助けしてやるといって、製品をだまし取り、これを二足三文の値でたたき売って現金化し、問屋には納付せず、政党資金にしたというあくどい詐欺事件である。私は被害をうけた問屋も知っていたし、また、小さいながら、似たような商売をしていた身を省みて、慄然ともし、『革命』や『思想』をふりかざしている人びとが、大企業ならまだしも、零細な小企業を倒産させて、昂然としている態度に憤りを感じて、その思いをぶっつけてみようとたくらんだのである」。

(5)『〈石牢礼道子全集・不知火〉別巻　自伝』（二〇一四年五月　藤原書店）の「年譜」には、一九六〇年の項の最後に「水俣病」があがっている。ただし、畑中章宏は『『日本残酷物語』を読む』（二〇一五年五月　平凡社新書）で、各巻に掲げられていた「執筆者」がのちの平凡社ライブラリー版では「執筆協力者」に書き換えられていることから、この部分も「作家石牟礼道子の原稿がもとになっている」のではないかと推測している。手を入れたのは当時、平凡社の編集者として『日本残酷物語』の実質的な編者を務め、後に異色の民俗学者となる谷川健一である。

(6)「残酷」のもとに掲載されている他の作家・作品は以下の通り。樹下太郎「真夏の女」、遠藤周作「悪魔」、大藪春彦「鼠掃除」、結城昌治「うまい話」、河野典生「陽光の下、若者は死ぬ」、黒岩重吾「法王の牙」。

(7)『奇病のかげに』は、全国各地の「NHK番組公開ライブラリー」および横浜市にある「放送ライブラリー」で視聴できる。NHK横浜放送局一階にある。（ここではフランスの動画共有サービス・デイリーモーション https://www.dailymotion.com/video/xzfv3j の映像を使用した。）なお、『奇病のかげに』を映像として詳細に分析したものにメディア文化研究の小林直毅の「テレビドキュメンタリーと『水俣の経験』」（小林直毅編『「水俣」の言説と表象』二〇〇七年六月　藤原書店）がある。映像が一四のシーンによって構成されているとの指摘がある。

(8)桜井均・東野真の前掲論文によれば、このシーンの一分余りの部分が放送時の映像から欠落しており、この部分について現在ではもう確かめることができないとのことである。また同論文には、この欠落部分が、番組を観た水上勉によって書下ろし長篇推理小説『海の牙』（一九六〇年四月　河出書房新社）に「転写」されているのではないかとの指摘がある。

(9)藤田真文「ニュース報道における『水俣』の表象」、小林直毅編『「水俣」の言説と表象』（二〇〇七年六月　藤原書店）所収。

(10)水俣病研究会編『水俣病研究資料集［上巻］』（一九九六年七月　葦書房）引用は「まえがき」ページ番号なし。

(11)注の1と同じ「『海の牙』について」。引用は424ページ。

(12)見出しが「十日の漁民大会」とあり、この後の引用でも「十日」とあるので、おそらく「十日」の誤りであろう。小説「不知火海沿岸」のもう一つのテキストであるカッパノベルス『日本代表推理小説全集　4　残酷・復讐編　不知火海沿岸』でもこの部分は「二十日」のままである。なお、『海の牙』にも同じ新聞記事があらわれるが、そこでは見出しも記事も同じく「二十日」となっている。

(13)カッパノベルズ版テキストでは「騒動」となっている。「騒擾」のほうが社会秩序を乱す犯罪に関係する意味あいが強く、新聞記事のこの部分は警察側の受けとめなので「騒擾」のほうが適当であろう。新聞記事のすぐあとの木田の受けとめでは「二日の騒動」となっている。漁民たちの怒りの行動への、秩序保持側からの「新聞」の反応と、患者と漁民にシンパシーをよせる木田のとらえかたの違いをあらわすよう書きわけられていた。

(14) 漁民の実力行使は一一月二日以前にもあった。一〇月一七日の「第二次漁民闘争」(『水俣病裁判全史第五巻総括編・別冊　水俣病略年表』二〇〇一年　日本評論社)である。これが「一」の一〇月二日の暴動に重ねられていたかははっきりしない。